

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！▶

ネットワーク

特集

子ども食堂の今、そして、未来

- 児童養護施設と地域が一緒に育てる
『そだちのシェアステーション・つぼみ』
- 体験型子ども食堂 NPO法人 らいおんはーと
- あらかわ子ども応援ネットワーク
- 生きるために、地域の枠を越えてつながっていこう
全国食支援活動協力会



～ 製作日記 ～



ぼらあめ



東京ボランティア・市民活動センター（以下、TVAC）では、2001年頃から『ぼらせん』を販売してきました。ボランティアセンターが『ボラセン』と略されることが多いことから着想を得て、おせんべいの『ぼらせん』を作ってみようという流れです。

そして、今回、新たな商品『ぼらあめ』が誕生しました!!

おせんべいだと会議中に食べづらいな、歯が弱くなると食べづらいな、もう少し気軽に誰もが楽しめて、TVACを紹介できるものが欲しいなと思っていた矢先、テレビでオリジナルの組飴製作の特集をたまたま観ていた1人のスタッフが、そこでひらめいたのです! 飴ならだれでも口にしやすいので、会議中にもなめられるし、何より、「飴ちゃん、どうぞ」と交流のきっかけにもなると。

早速、製作工場に連絡し、味見用のサンプルを取り寄せてみたり、デザイン案を考えてみたり、と複数のスタッフで和気あいあいと飴製作に向けて動き出しました。

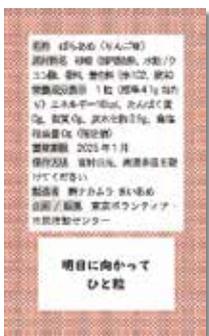
デザインや味が決まり、ようやく組飴の製作を発注することができたのですが、組飴は飴職人による手作

り。なので、注文してから受け取りまで約4か月かかりました。けれど、この待つ時間はほんのな飴が届くのか、本当にデザインがきれいに作られるのか、楽しみと不安が入り混じりドキドキでした。

1月の終わり、ついに飴が納品!! 箱を開けてみると小さくてかわいい、そしてデザイン案通りの飴がたくさん詰まっていました。袋に同封する通称「ぼらあめカード」(商品情報や飴の紹介を記載したカード)を作成し、袋詰めをして、ついに『ぼらあめ』が完成しました!!



ぼらあめカードにはランダムにキャッチフレーズも。



『ぼらあめ』 3個パック100円、10個パック300円
『ぼらせん』 1枚110円、5枚パック550円 ※全て税込



『ぼらあめ』や『ぼらせん』は、TVACにあるふれあい満点市場やウェブサイト(左記QRコードより)で販売しています。ぜひご購入、ご賞味ください!



地球の友と歩む会/LIFE



インドネシア・スンバ島と日本の福祉作業所支援につながるクッキーを販売。冬季限定「デビルクッキー」は大人気！クラフトに見入るお客さんの姿も。

オレンジライン



視覚障がい者の就労・生活支援を行う団体。商品の種類が豊富でした。点字の焼印が入ったおせんべいは、毎年恒例でとても好評な商品です。

未来の福島子ども基金



姉妹団体の「チェルノブイリ子ども基金」とともに、原発関連書籍、マグネットやカレンダーなどを販売。ウクライナ製のふきんも大好評でした。

東京カリタスの家



様々な課題を抱える人びとに寄り添う活動をしている、東京カリタスの家ではべてるの家の昆布を販売。サイズや等級はばらばらでも非常に良質な昆布です！

編集部発

いいもの
みい〜つけた！
番外編

ふれあい満点市場

in ボランタリーフォーラム TOKYO 2024

東京ボランティア・市民活動センターが毎年2月に行う「ボランタリーフォーラム」が、今年も2月9日～11日の3日間開催されました！この催しで実施した「ふれあい満点市場」の様子をお伝えします。普段から、当センターにて福祉施設やNGO・NPOの手づくり作品を販売していますが、常設の「ふれあい満点市場」には置いていない商品も盛りだくさんでした。「いいものみい〜つけた！番外編」として、今回はいいものをつくる・売る人たちを中心にご紹介します！

東京都青年団体連合



東日本大震災で被災した宮城県南三陸町の方々が編んだエコたわしを13年販売しているそうです。商品を掲げて、皆さんでにっこり♪

かたくり



定評ある布ぞうりに加え、すべて1点ものの刺し子のふきんも売られていました。「使うのがもったいない、と飾っている人もいます」とスタッフさん。

ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク



活動の様子がわかる写真を背景に、スタッフの方が自ら商品のエプロンを着て販売。色もデザインも豊富なバティックが会場に彩りを添えていました。

第二ワーク・イン・あすか



障がいのある人が地域で自立生活を送るため、働く場をつくらせている福祉作業所。マドレーヌ、ブラウニー、パウンドケーキなど、手づくりの逸品！

飛鳥会 つばさ工房



精神障がいの人びとによって、丁寧に手づくりされたジャムが10種類。素材の味を最大限に活かすために、果物とてんさい糖だけでつくるそうです。



深める

ボランティア・市民活動に役立つ視点や情報をお届けします。

特集

子ども食堂の今、そして、未来

- 5 児童養護施設と地域と一緒に子どもたちを育てる
◇社会福祉法人 子供の家「そだちのシェアステーション・つぼみ」
- 7 体験型子ども食堂で子どもも大人も育つ場に！
◇NPO法人 らいおんはーと
- 10 わかち合おう、学び合おう 都内の子ども食堂つながりづくり
- 11 ゆるやかに連携し子どもをサポートする あらかわ子ども応援ネットワーク
◇荒川区社会福祉協議会
- 13 生きるために、地域の枠を越えてつながっていこう
◇全国食支援活動協力会
- 17 子ども食堂を知りたい、応援したい、つくりたい！
- 18 **あすマネ** 「人が足りない」を考える

知る

ボランティア・市民活動のさまざまな形や
ボランティアに一步ふみだすヒントをご紹介します。

- 1 ぼらあめ ～製作日記～
ふれあい満点市場 in ボランティアフォーラム TOKYO 2024
- 21 **TVAC News** 東京ボランティア・市民活動センターの事業から
能登半島地震における対応について／2024年度ボランティア・市民活動総合基金「ゆめ応援ファンド」
助成決定／第6回「都内子ども食堂、子どもの食支援ネットワーク等担当者連絡会」を開催
- 23 **つぶやきブレイク vol.31**
My Favorite Things ～私のお気に入り～
- 25 **いいもの みい～つけた！ Vol.48**
アートで地域共生！！
障害福祉施設と作る、UTme! T シャツ
◇台東区社会福祉協議会



表紙のことば

暖かいの寒いのと云っても、
夕方は明るいし、草は伸び、花は順繰りに咲いて、
自然は人なんかおかまいなし。
時に何かに押しつぶされそうになっても、
いつのまにか緑と花の世界。
マツク人なんかおかまいなしです、
自然てやつは。 —フローラル信子

もしもボランティア活動中にケガをしたら… ケガをさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。



東京都社会福祉協議会指定生損保代理店
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル 3階

TEL. 03-3268-0910
FAX. 03-3268-8832





特集

子ども食堂の今、 そして、未来

「子ども食堂」は、今や多くの人が耳にしたことがある言葉だと思います。

その数は年々増加しており、全国で9,000か所余りあるそうです(本誌17ページ参照)。対象は、経済的に困窮している家庭の子どもに限定するところから、さまざまな課題を抱えている子どもやその親、地域の高齢の人や障害のある人にまで拡大し、食の提供に加えて居場所の機能を併せ持つ様子もうかがえます。

今号では、子ども食堂の活動状況や、子ども食堂のネットワーク、食の分配システムなどについて取材しました。子ども食堂で活動している市民はもちろん、これから始めたい人や、応援したい人の参考になると幸いです。



■ 児童養護施設と地域が 一緒に子どもたちを育てる

社会福祉法人子供の家『そだちのシェアステーション・つぼみ』

東京都清瀬市にある児童養護施設子供の家では、地域のボランティア団体と連携して子ども食堂を開催しています。今回は、金曜日の夜におじゃまし、一緒においしい食事をこちそうになりながら、取材させていただきました。

— ワイワイ・ガヤガヤ楽しい食卓

午後6時。あたりがそろそろ暗くなり始めると、子供の家が地域に開放しているスペースに子どもたちが集まってきました。今日のメニューは具だくさんのカレーと色とりどりのサラダ、バナナ、みかん。「今日はいつもとよりシンプルかな」とボランティアさん。食材は清瀬市からの助成金で購入したり、フードバンクや社会福祉協議会（以下、杜協）、他の子ども食堂からいただいたもので、毎回、約40人分の食事を用意してい

ます。食事までの時間は子どもたち同士でゲームをしたり、大学生ボランティアのお兄さん・お姉さんと遊んだり…。

今日の参加者は小学生12人。来ることができな親子のために20人分のお弁当も用意し、職員やボランティアで手分けをして配達します。4つのテーブルに分かれて、「いただきます!」。カレーは手作りの優しい家庭の味。子どもたちとボランティアさんがおしゃべりしながら、にぎやかな食卓です。いろんな世代がいて、親戚の集まりのよう。

— 地域のボランティアの協力

食事を作ってくれているボランティアさんは地域のボランティア団体おひさまネットワークのメンバーです。「子どもたちにおひさまのよう

2014年に子ども食堂をスタートし、現在は市内15箇所広がっています。開催場所も地域の集会所や高齢者施設、大学とさまざま。子供の家では2015年から始まりました。こうした公共施設や福祉施設が協力

してくれると、会場費がかからなかったり、キッチンや冷蔵庫があったりして、とても助かっているようです。調理のボランティアさんたちは、「料理をするのが好きだったから」「食に関する仕事をしてきたので」、子どもたちのためにこの活動を始めたことでした。「子どもたちが喜んで食べてくれると嬉しい」と言います。また、学生ボランティアの皆さんは市内の大学に通っています。「もちろん勉強にもなりますが、子どもたちと遊ぶのが好きだから」続けているとのこと。一人暮らしの学生にとっても家庭の味は嬉しいのではないのでしょうか。



(右) 今日の献立は皆が大好きなカレー！
 (上) おひさまネットワークの調理ボランティアの皆さん。
 (左) 子供の家『そだちのシェアステーション・つぼみ』を担当する職員の能村さん。
 (左端) ある日のお弁当。(写真提供=子供の家)

子供の家の職員である能村愛さんに、児童養護施設での子ども食堂についてお話を伺いました。

——子ども食堂に施設を活用してもらうことになったきっかけは？

児童養護施設にはさまざまな事情で家族と暮らすことができない子どもたちが暮らしています。そして、地域の子どもの家族にも支援を広げていくことが求められています。

8年前におひさまネットワークから「子ども食堂のために場所を貸してくれないか」という相談がありました。当初は、施設の子どもたちのプライバシーを守るために生活棟ではなく、事務棟で小規模に開催していました。日本財団の『子ども第三の居場所事業』（以下、『居場所事業』）の助成を受け、『そだちのシェアステーション・つぼみ』（以下、『つぼみ』）ができたので、今はこの施設と園庭を地域の子どもたちにも開放しています。

——子ども食堂に来る子どもたちは？

毎週月～金は家庭での子育て以外に、もう少しサポートが必要そうな

地域の子どもたちが『居場所事業』に事前登録をして、『つぼみ』で施設職員と遊んだり、勉強したり、相談したりしています。そして、毎週金曜日には本事業に登録しているご家庭の小学生と、以前からおひさまネットワークの子ども食堂に参加していた小学生から高校生までが一緒に夕食を共にしています。また、もうひとつの『竹丘子ども食堂』もこの施設を使って、月に2回水曜日に地域のご家庭にお弁当を配布しています。

『つぼみ』の土曜日開放では、月に一度、地域の子どもや保護者の方に昼食の提供をしており、『竹丘子ども食堂』とおひさまネットワークと協働で準備をしています。施設の子どもたちも、土曜日のお昼に参加して、さつまいもを焼いたり、井ものやすいとん、寒天ゼリーなどを作って食べる体験を楽しんでいます。

——児童養護施設が子ども食堂をすることの意義は？

児童養護施設のことを地域の人に知ってもらうことや、地域の子どもたちやその家族のニーズをキャッチし、予防的な支援ができること、他に、施設の職員の学びの場にもなっ

ていると思います。例えば、施設では食育や食品ロスの観点から、子どもたちが食事を残さないように言い、食べる前に量を調整しがちですが、地域のボランティアの方々には子どもたちが食事を楽しむことを大切にすることで、「ちょっと食べてみて」と優しく話しかけます。このように、施設のルールややり方を別の視点で考えてみることもできるのです。

また、児童養護施設には、さまざまなイベントへの招待などが届きませんが、こうした体験の機会を地域の子どもたちとも共有することができないのではないかと思います。

児童福祉施設がボランティアやNPO、大学、社協、行政など、地域の支援者たちとつながることで、施設で暮らす子どもたちも家庭で暮らす子どもたちも地域で育てることができるとは思いません。



社会福祉法人 子供の家
 児童養護施設 子供の家



体験型子ども食堂で

子どもも大人も育つ場に！

NPO法人らいおんはーと

江戸川区で子ども食堂を中心に、学習支援やフリースクールを営むNPO法人らいおんはーと。「すべての子どもたちに豊かで幸せな人生を！」を基本理念として365日食堂を開いています。理事長の及川信之さんと、コーディネーターの佐藤すみさんにお話をうかがいました。

子ども食堂で格差の解消を

—まず、活動のきっかけからお聞かせください。

及川 子どもが小学生だった時に所属したおやじの会から始まり、その後、中学校でPTA会長を務めたのがきっかけです。おやじの会の時代から知っている子どもが多かったこともあり、生徒やその親、先生など

から相談が来るんですね。全員を我が子と思って取り組んでいるうちに5年経っていました。

交流したり、相談できる場をつくるうと、2017年に小学校で月2回、子ども食堂を始めました。そこには1回につき70人程度集まったのですが、1人ずつとの関係性が築きづらいつ感じ、365日子ども食堂『NUKUNUKU』を始めました。

—子どもや家庭にどのような課題があったのでしょうか。

佐藤 1つは格差です。ひとり親の場合、収入が充分ではない家庭が少なくありません。子どもを塾に通わせることができない「教育の格差」や、十分に食べさせることのできない「栄養の格差」、そして、誕生日会や旅行などのイベントができない「体



(右) 包丁を持ったことのない子ども調理ができるようになる。
 (左) ハロウィンパーティ。大人も楽しそう。
 (左下) 元塾講師や大学生などが学習指導をしている。
 (下) 初の特別支援学級 学校進路フェアが3月17日に開催され、学校や福祉施設、企業など41のブースが出展。開場の10時には人でにぎわっていた。

写真・画像提供=らいおんはーと(P.7~8)



験の格差」もあります。また、両親がいてもネグレクト(育児放棄)されている、いじめなどが原因で不登校になるなどの課題があります。

子ども食堂を始めた当時は、貧困家庭の子どもが利用するというイメージが強く、来る子は少なかったそうです。子どもたちの参加が増えたのは、学習支援をするようになってからです。ご飯つきで学習サポートをする、という形で始めました。

——「体験の格差」解消のためにされていることはありますか？

佐藤 月毎での誕生会や節分、クリスマスなどの行事をしています。子どもの頃にそうした体験をしていない親もいるので、親にも参加していただいています。つらい子ども時代を経てきた親もいて、負の連鎖を止めるためにも、こういう場が必要だと考えています。「子育ては人に頼ってもいい」と、この子ども食堂に通ううちに私自身が思えるようになりました。私は、産前産後の鬱状態でらいおんはーとを訪れて、今は元気になり社会復帰もできたという、自分で言うのも変ですが、成功事例的な存在なんです。

体験型子ども食堂として 自立の力を養う

——子ども食堂には、場所や食材、人の確保が必要だと思いますが、らいおんはーとではどのようにされていますか。

及川 場所については、江戸川区の教育長が我々の活動に共感して、無償で貸してくださる方を紹介していただきました。食べ物、食品会社やパルシステム、近所の農家・惣菜屋・パン屋さんなどが寄付してくださいます。献立はなく、その日にある食材でメニューを決めています。ここには、業務用の冷蔵庫冷凍庫が1台とストッカーが2台ありますが、大量の食材をいただいた場合は、フードパントリー¹⁾のネットワーク団体に渡しています。フードロス問題にも貢献できているのかなと思います。

人についてですが、スタッフは4人でボランティアは150人ほどいます。ボランティアの役割はきっちり分けておらず、シフトもつくっていません。来られる時に来てもらっています。らいおんはーとは、調理、配膳、掃除まで、子どもも一緒にやっている「体験型子ども食堂」なんです。

即興でポーズを決めてくれた
及川さん(左)と佐藤さん。



義務教育終了後の進路についての情報提供や相談窓口をもうけます。

——ネットワークが広いのも特徴ですね。

及川 理事12人中9人がPTA会長経験者なので、学校や行政とつながっています。また、この建物のオーナーさんの所属するロータリークラブからご支援いただき、私が講演やラジオなどでお話しているいろいろな人と出会い、つながりができています。

365日24時間 子ども食堂をめざして

——他の取材でトー横キッズ³の話もされてきましたね。

及川 勇者の会⁴という団体から、一緒にトー横キッズの支援をしないかと声をかけていただいたのがきっかけです。調べたら、江戸川区の子どもたちも歌舞伎町に行っていることがわかりました。トー横キッズのもとに悪い大人が近づいて、薬を売ったり、体を売って話をする…という問題が起きています。だから、行く前になんとかしよう、一時保護的な場所をつくりたいのです。その

ために、子ども食堂を24時間にするべく、現在は物件を探しているところです。

——最後に、感じている課題や展望についてお聞かせください。

佐藤 課題はPR活動ですね。子ども食堂全体で周知が弱いと感じます。当法人ではホームページを全改修して、SNSを始めたなら、必要としている子どもたちに情報が届いたり、企業などからの支援につながりやすくになりました。もう一つは、資金調達。NPOの場合、共感を得ないと資金調達につながらないので、応援してもらおう仕組みをつくりたいですね。将来的にはそのノウハウを公開して、他の子ども食堂で参考にしていたら、救える子どもが増えるのでは、と思います。

及川 仕事を辞めて子ども食堂を始めた当時は、「どうやって食べていくんだ」など散々言われました。今は、「すごいね」と言われるのですが、昔から誰かがやっていたことで、それを子ども食堂と名前を変えてやっているだけのこと。想いだけではできませんが、想いを忘れずに活動を続けていきたいと思っています。

*1

フードパントリー
食料品の入手が困難な人に無料で配布する活動や場所のこと。
ぬくもりフードパントリーは『NUKUNUKU』(ふいおんはー)を拠点として、ひとり親を中心に江戸川区と千葉県市川市に15か所のパントリーを設け、食料品の無料配布をしている。

*2

フリースクール
子どもの自主性を尊重し、学校教育の枠にとられない学びの場づくりをする民間の教育施設。日本では、何らかの理由で学校に行かない子どもたちの学習支援や居場所を提供する施設という見方をされることが多い。

*3

トー横キッズ
東京都新宿区歌舞伎町にある「新宿東宝ビル」周辺に集まる若者の集団のこと。

*4

勇者の会
人の役に立ちたい、人助けをしたい、という志を持った格闘家のグループ。会長はアトラントオリピック、レスリング元日本代表の西見健吉氏。



らいおんはーと

わかち合おう、学び合おう 都内の子ども食堂つながりづくり

都内子ども食堂・子どもの食支援ネットワーク等担当者連絡会

■顔の見える関係づくりを

子どものために「食」や「居場所」を提供する子ども食堂、お弁当や食材等を配布するフードパントリーの活動が都内各地でも広がっています。地域ごとのネットワークや連絡会の発足などが盛んになる中で、都内各地のネットワークの状況の共有や共通課題を話し合い、顔の見える関係づくりができる場として、「都内子ども食堂・子どもの食支援ネットワーク等担当者連絡会」を開催しています。2021年10月に第1回を開催、その後、企画メイトを募集して、これまでに6回行いました(本誌22ページ参照)。

メンバーは、社会福祉協議会、ボランティア・市民活動センターや行政などで食の支援に関わる担当者や、上記団体のネットワークの事務局を担う人などです。

■みんなで学び、考え、取り組む場に

企画メイトとの打ち合わせで、子ども食堂の実践者向けに「都内子ども食堂・子どもの食支援関係者向け学習交流会」もスタートしました。都内で子ども食堂の運営にかかわる人はもちろん、これから活動したいという人や食支援以外で子どもに関する支援をしている人など、都外の人も含めて多くの参加がありました。

交流会担当者は以下のようにコメントをしています。「各地域で活動をどう支えていくか、これからも情報交換できる場をもうけていきたいと考えています。そして、子どもたちのためにできることをみんなで考え、みんなで取り組む、そんな輪を広げていきたいと思ひます」

東京ボランティア・市民活動センター × 東京都社会福祉協議会・地域福祉部

都内子ども食堂・子どもの食支援関係者向け学習交流会
子ども食堂の話し
たくさん話しちゃおう!

都内子ども食堂ネットワークを通じて、多様な団体との交流を深めます。環境に配慮した活動や団体との連携、気になる子どものかかわり方、子ども食堂自費のレシピなど様々な工夫をされている団体との交流ができる場として交流会を開催します。

令和5年11月29日(水) 10時~12時
 東京都社会福祉協議会会議室 12階会議室
 (東京都新宿区神楽河岸1-1)

【最寄駅】 JR 飯田橋駅西口・地下鉄飯田橋駅B2b出口すぐ
 【対象】 都内子ども食堂運営者、その他関心のある方
 【定員】 90名

参加費 無料

事例紹介
 1. 葛川区 子どもゆめ食堂だんらん
 「環境に配慮した食づくりについて」

前半

【タイム】
 各地域の活い方と交流してみよう
 例を聞き、気になるテーマで交流しよう
 ・自然環境、地域環境への配慮
 ・複数団体での協力・イベントの実施
 ・気になる子どもへのかかわり
 ・子ども食堂のこだわりレシピ
 食に對して交流しよう

【事務局】
 東京都新宿区神楽河岸1-1 飯田橋セントラルプラザ

第6回
都内子ども食堂・子どもの食支援ネットワーク等担当者連絡会

地域とつながる
いろいろなカタチ

子どもの「食」や「居場所」を提供する子ども食堂、お弁当や食材等を配布するフードパントリーを実施する活動が各地で広がっています。ネットワークや連絡会の発足等、活動が盛んになる中で、都内や他府県のネットワークの状況共有や共通課題を話し合い、顔の見える関係づくりができる場として、連絡会を開催します。

令和5年2月20日(火)
 14時~17時(途中休憩含む)

17時より20分程度、最終会場を退きます。参加費は、東京ボランティア・市民活動センター 会議室 (東京都新宿区神楽河岸1-1) セントラルプラザ10階

【対象】 社協、ボランティア・市民活動センターや行政などで子ども食堂やパントリー等、食の支援に関わる担当者の方。上記の団体同士のネットワークの事務局を担う方。

【申し込み】 ネットワークや連絡会のメンバーがいらっしゃらば、50名程度お持ち下さい。

※当日で参加が難しい場合はメンバーがいらっしゃらば、東京ボランティア・市民活動センターへ事前に申し送り下さい。開演前のみの場合は、1階で伺いませしが可能でしたら各自お申込み下さい。当日会場でお申し込み、残りはセンターに依頼させていただきます。

【プログラム内容】
 ● 連絡会・ネットワークの連絡紹介
 発表者：協議会社会福祉協議会 山田 佳央子 氏
 「いざよし子どもの発達支援活動会」について、福知山フードパントリーについて など
 ● 情報や意見の交換
 「ネットワークや連絡会内での地域ごと、食の配布や運営での地域との繋がりが、協賛での取り組みなどについて、みなさまが気になっていることについてグループで情報交換します」
 ● 放談後タイム ※希望者のみ

【主催】 東京ボランティア・市民活動センター
 (東京都新宿区神楽河岸1-1) セントラルプラザ10階
 TEL: 03-3235-1171
 担当: 櫻本・熊谷(地域福祉部西山)

申し込み URL又はQRコードより必要事項を入力の上、お申込み下さい。
 (URL: <https://www.tvac.or.jp/20240220.html>)



都内各地域の子ども食堂ネットワーク、連絡会や支援組織については、こちらのQRコードからご覧いただけます。



■ ゆるやかに連携し子どもをサポートする あらかわ子ども応援ネットワーク

(上) 毎月第3日曜日に行われるひとり親フードパントリーの当日の準備風景。ひとり親世帯等食品を必要とする約150世帯に配る。荒川区補助金のほか、企業、区環境リサイクル課のフードドライブによる寄付物品等で賄う。当日の準備や受付等運営には多くのボランティアがかかわる。

(左ページ) あらかわ子ども応援ネットワークの図。子どもの居場所(7か所)、子ども食堂(13か所)を中心に様々な組織が参加する(2024年3月末現在)。(写真・図提供=荒川区社会福祉協議会)

荒川区社会福祉協議会

あらかわ子ども応援ネットワーク(以下、応援ネットワーク)は、子どもたちの成長を地域みんなでサポートしよう子ども食堂等の活動団体をはじめ、荒川区の関連部署や地域の様々な組織が連携し活動しています。応援ネットワークの事務局を担う荒川区社会福祉協議会(以下、荒川社協)の鈴木祐司さん、浅野芳明さんにお話をうかがいました。

——応援ネットワークが設立された経緯を教えてください。

荒川区では、行政が子どもの貧困等の対策として無料の学習サポートを実施するなか、そのコーディネーターを務めるOさんから、家族機能の弱い子どもには学習支援だけでなく、居場所を拠り所に「ソーシャルファミリー」をつくる必要性が寄せられました。相談を受けた荒川社協では「子ども村・中高生ホッとステーション」の立ち上げを支援し、行政に働きかけ、補助金が創設されると、ボランティアによって次々と食事・学習・暮らしの支援に取り組む「子どもの居場所」や「子ども食堂」の活動が始まりました。そこで、それらの団体同士が子どもを真ん中に手をつなぐと応援ネットワークをつく

り(2017年)、荒川区の子育て支援課等関連部署、区教育委員会、NPO法人、福祉・医療・教育機関なども加わって一緒に活動しています(左ページ図)。

——応援ネットワークではどのような活動をしていますか。

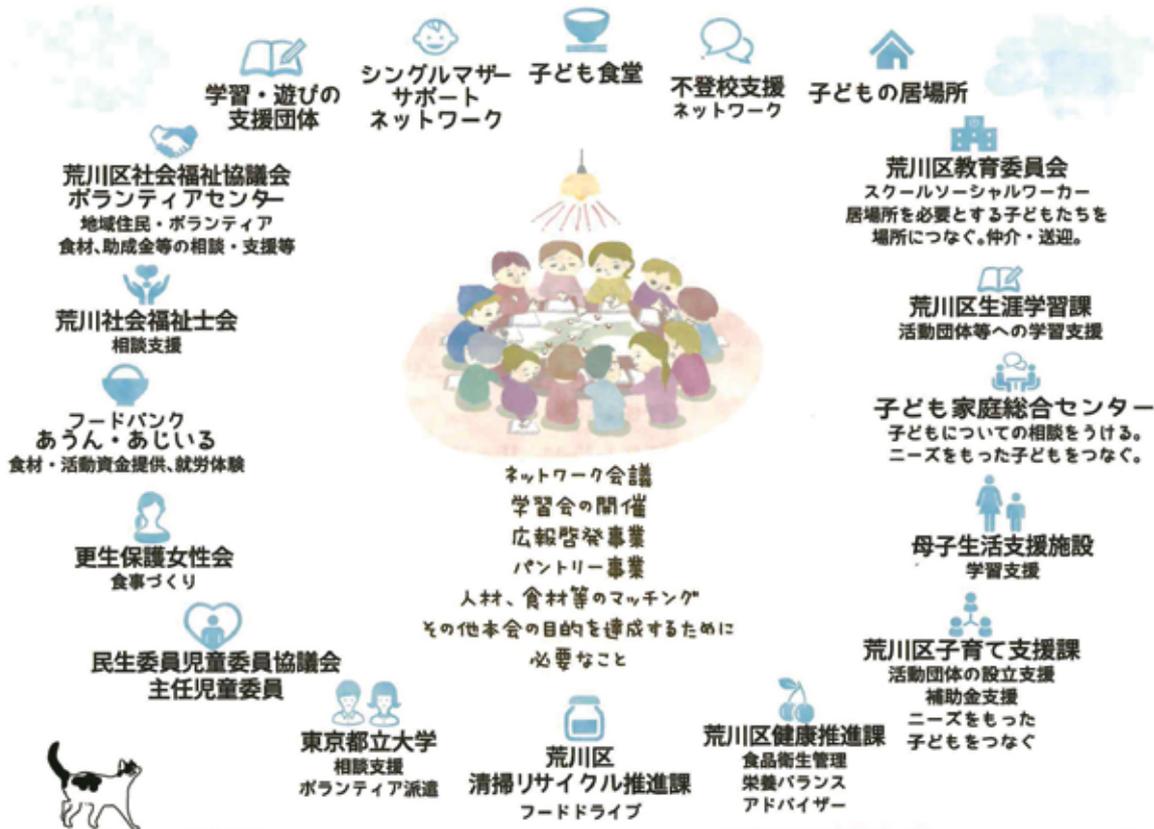
年4回程集まって、情報交換や研修を行うほか、食品など寄付物品を分配しています。荒川区では、子ども中心に誰でも参加できる「子ども食堂」(オープン型)と、様々なニーズをもった子どもを対象に食事の提供と学習支援を行う「子どもの居場所」(クローズ型)に分けていますが、ほとんどの団体は規模が小さく、自分たちで食材や活動資金を集めたり、一緒に活動するボランティアを求めながら活動が続けることが難しいのが実状です。応援ネットワークに参加することで食材などの物品を得やすくなり、団体同士で情報交換しながら活動をすすめられます。

また応援ネットワークの活動から、課題を抱える子どもの存在に気づいた例もあり、こうしたニーズの発見は応援ネットワークの大事な役割だと思っています。

コロナ禍には子ども食堂はもち

あらかわ子ども応援ネットワーク

Arakawa Kodomo Ouen Network



ろん、生活上いろいろな制約を受け
るなかで、経済的困窮を抱えるひと
り親家庭を心配する声上がり、応
援ネットワークとしてフードパン
トリーに取り組み、現在も継続してい
ます(右ページ写真)。

——様々なみなさんが参加する応援
ネットワークですが、運営はどのよう
にすすめていますか。

おおまかには、荒川社協が人的支
援と物的支援を、行政が資金面の支
援を担って運営しています。毎日ど
こかで食事ができるまちにしてい
たいと思い、同じ圏域では開催日を
重ねないように調整したり、ポラン
ティア説明会を開催して子ども食堂
の活動を理解したうえで活動に参加
してもらうなどコーディネートを行
っています。

食料など寄付については、受付か
ら倉庫での管理、分配までを荒川社
協が担っています。分配のしくみは、
寄付を受けると応援ネットワークの
メンバーリスト上に物品名や数量
を知らせ、それに対し各メンバーが
希望を出し、できるだけその希望に
そって物品を配るといふものです。
現在物品の保管は、行政や活動団体
などの協力を得て3か所の倉庫で

賄っていますが、賞味期限のある食
品の保管や運搬の担い手などに課題
を感じています。

——応援ネットワークのこれからにつ
いて聞かせてください。

オープン型・クローズ型のメンバー
はそれぞれに思いがあり、個別の課
題への対応や情報交換したいテーマ
は必ずしも同じではありません。活
動が多岐にわたるなか、全体での議
論も大切にしつつ、今後はオープン
型・クローズ型それぞれの部会の開
催なども必要かもしれません。

子どもを中心にした活動とは言っ
ても、応援ネットワークのかかわり
は家族や学校など多方面に及び直
面する課題は様々です。支援の狭間に
いる人に気づいたときにどうするか、
柔軟に対応していくには運営のゆる
やかさが生きるのかもしれないね。
これまでも支えてもらってきた地域
のみなさんと取り組んでいきたいと
思っています。



あらかわ
子ども応援ネットワーク

■ 生きるために、地域の枠を越えてつながっていきこう

平野覚治（全国食支援活動協力会）

一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事の平野覚治さんにお話をうかがいました。

コロナを契機として始まった食料品の分配システム

2016年度から3年間かけて実行委員会形式の「広がれ、子ども食堂の輪！全国ツアー」¹をやった後、JANPIA²の助成金を得て、2020年4月から全国4地域で「子ども食堂サポート機能設置事業」を稼働する予定だったのですが、その直前に新型コロナウイルスの流行が始まってしまいました。ご存知のとおりそれ以降はさまざまな産業がダメージを受けて、非正規の人たちが大量に失業する状況が発生しました。全国ツアーで知り合った各地域の方々からも生活に困っている人がいるという話をたくさん聞きました。そのとき、各地の現場で何が起き

ていたかというところ、子ども食堂とか、高齢者の居場所をやっている人だとか、社協³や小さな社会福祉施設だとかが独自で支援を行っていたわけです。

そうした中でわたしたちは1億5千万円分の食品寄付の話が企業からいただいたのですが、「個々の団体に直接送る形だと食品そのもの以上の配送コストがかかってしまう。またまった形で引き受けてほしい」と言われました。それがひとつの契機となって、こうした動きが継続していくためには、一括でもらった上で全国に分配できるように合理的な仕組みが必要だと考え、この「ミールズ・オン・ホイールズ ロジシステム」⁴がスタートしたんです。

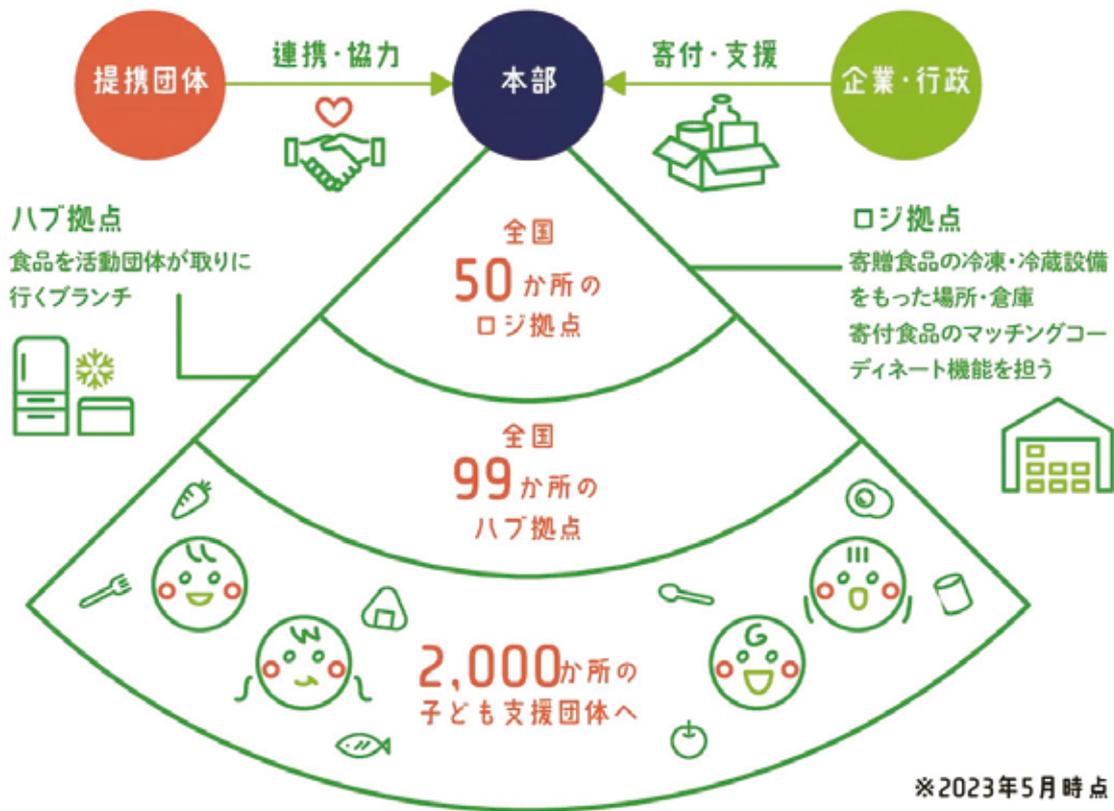
初めは全国で10地域でしたが、今は34県・70地域で、ハブ拠点は200か所ぐらい、団体も2700団体にどどぐらいいなってきました。あの意味、社会インフラ的なイメージのものになってきていると思います。

モノを持たず、お金が介在しない、新しい配分の形を模索

この1月に国際交流基金の事業でベルリンのターフェル(Tafel)というフードバンク⁵を訪問しました。ターフェルでは、ターフェルが設置した回収箱に市民がペットボトルを入れると、1本につき30円ぐらいのデポジット料が収入になり、それでトラックを買ったり、倉庫を維持しているんですが、実はこの仕組みには貨幣が介在していません。配送料もとらず、公的資金にたよっているわけでもなく、利用者にも負担のないしくみがありました。70年代のユーロコミュニティ⁶みたいなものの新しい形なのかもしれません。

そういうお金が介在しない形で、必要とする人たちに必要とするものを再分配する社会の仕組みが日本でもできるんじゃないかと私は想定していて、それを作っていきたいという思いがあります。一度そういう仕





「ミールズ・オン・ホイールズロジシステム」の概念図。
 なお、各数字の最新値については本文を参照のこと。

組みができてしまえばそれは簡単に潰れないし、それがもし全国枠でできたら、きっと世界でもできると思うんですよ。

加えて、世界的にフードバンクというのはモノをもらってきて、ストックして、モノとして配る形が多いんですが、私はトラックや倉庫、オペ

レーション等にお金をかけるつもりは全然なくて、全部電子情報で、「差配」という形でいいんじゃないかと考えています。もらったものを配分するモデルではありませんが、モノ自体を持つことはしない。商品が渡るわけではなく情報が渡るルートということですね。

すべてを内包する「網」としてのプラットフォーム

全国の子ども食堂の5割ぐらいは、おそらく利用料を取っていません。そうすると、本来なら運営が回るはずがないんですよ、お金がゼロなんです。となると、その活動を終了させないとするのであれば、それが回っていけるような大きな船に乗せてあげるしかないわけです。

だから、そんな新しい社会活動も可能性のひとつとして包摂していけるような「プラットフォーム」を、地域の中で作っていく必要がある。

わたしたちが全国ツアーでやったのもそれなんです。民生児童委員、生活支援施設、全母協⁷、社協とか、在宅福祉・子ども・老人福祉等にかかわる既存のコミュニティが、新しい子どもの居場所づくりをやっている子ども食堂というものを地域の中で

排除しないで受け容れましょうというのを伝える取り組みでした。

わたしたちは、子どもだとか高齢者だとかの活動分野でも、地域でも、参加団体を切ることはしません。もちろん現実には地域によってさまざまな事情があるでしょうが、少なくとも概念的なものとしては、すべてを内包するようなプラットフォームを作っていくと、今の地方自治ではもう成り立たないんです。

もしそうしたプラットフォームができていけば、そこに新しい未来が生まれる可能性があると期待しています。このネットワーク自体に実は意味があって、いろんな「網」がいくつもできていくことによって、子どもから若者、高齢者、障がい者、外国人までカバーできる可能性があるはずじゃないですか。

そして、それを生み出すインキュベーション機能⁸があるのは、やっぱり食べる場と居場所。子ども食堂、地域食堂、老人給食というものにはその意味があると私は思います。

「もはや日常」の現実に対してわたしたちができることは

子ども食堂・地域食堂の設立年を見てみると、実はコロナ禍下で生ま



全国食支援活動協会発行の冊子類。
『「食」を通じた地域の見守り・支え合いガイドブック』(左)と
『「食でつながる」活動ガイドブック 事例から考えるアセット活用アイデア』。
同会のウェブサイトからダウンロード可能。
<https://mow.jp/archive/>

れた団体が5割近いんですが、そうした団体というのはもともとの始まりが「コミュニティ」ではなくて「貧困対策」なわけです。だから、たとえコロナ禍が終わっても、コロナに起因しない困窮状態の方々を目の前にしているから、やめることができない。

だけど、絶対貧困と相対貧困、それから生活不安層と呼ばれる人たちを全部あわせるとすでに全人口の5割を越えているという話もあります。

そうなる、これは福祉というよりはたぶんもう日常なんです。人も50パーセントを超えちゃうと社会現象、通常現象であって、それはつまりどういうことかということ、もはや誰かが手を差し伸べなきゃいけないというような状況ではないんです。

そこまで来ると、そこから復活させていくのはもう個々の団体の役割ではなくて、国や都道府県、あるいはひとつの業界全体の仕事なのではないか。団体の役割はきつかけを作ってつながりをつけることであって、主体的な責任者ではないんじゃないか。そこはやっぱり冷静に考えていかないと、つぶれちゃいますよ。僕はそう思います。

だから、その人たちが考えなくちゃいけないのは、できないならできないことを想定して、じゃあどうやって

やり続けることを考えていくのか。たとえば方向を変えて、子どもの遊び場に転換しましょうでも全然いいと私は思う。つまり、個人のできるレベル。組織じゃなくて、そのレベルに戻す。例えば、日赤や共同募金に寄付するでもいいと思う。自分たちができることをやればいい。

利用する人たちを問題の中心にすえた議論を

私は昔から老人福祉をやってきましたが、そこには利用者がいるし、ボランティアも多くはお年寄りです。その中で、論点はつねに「この人たち」利用者が、であって、「老人給食が」ではありませんでした。ところが、今の子ども食堂の議論は「子ども食堂が」になってしまっていて、そこには危うさを感じてもいます。

「エンパワーメント」という言葉の使い方にしても、団体のエンパワーメントというのももちろん大事だけど、子ども食堂で言えばそこに来る親だとか、子ども自体、若者自体がエンパワーされなかったら最終的には意味がないんです。

だから、食事を出すだけではなくて、例えば月に1回調理教室を開く。あるいは生活訓練だとか、就業の

マッチングとか、若い人たちの居場所づくりとかをやって、子どもたちや利用者の人たち「が」力をつけていく。ひとつの子どもの食堂だとか居場所ですることには限りがあるだろうから、そこは横に繋がって、情報がもっと行き交うようにして、おたがいに各地域の中でできることをやっていけばいい。

私は若い頃、子ども会や冒険遊び場にかかわるなかでいろいろな方からいろいろな生き方を教わってきて、人は経験によって多様な可能性を手にすることができるとだということをもっと学びました。子どもや若者たちが自分たちでチャレンジできる可能性をもらって、彼らがまた次の代に伝えていけるような、未来につながる循環が生まれてくれることを願っています。

あと、怖いなど思うのは、子どもの居場所にもれなく補助金をつける自治体や社協が、2019年にわたしたちが厚生労働省と行った調査では1割に満たなかったんですが、今は5割近くに達しています。

老人給食はもう40年以上やってますので、そういう流れは何度も見してきました。補助金はいつかなくなるんです。介護保険でお金がつくと。思ったら何年後には打ち切られ

「生きるためにみんな考えて、
そしてつながっていい」

日本の自治体の半分以上はいわゆる中山間地と呼ばれる地域なんです。これがあと数十年のうちには消滅するだろうという話があります。そうした地域に限らず、これからは消えていく市町村も出てくる時代になっていくでしょう。

それと同じことがたぶん子ども食堂にも起きますから、そうなると活動を継続できるのかという話にもなってくるでしょう。老人給食もそうでしたから。

だから、古くから地域で活動している人たちと話をし、知見ももらって、どう生きたらいいのかわかるように話してほしいなと思いますね。

また別の話ですが、食堂の利用者の中に、たとえば1時間かけて電車やバスに乗ってくるような人たちがいるという話を聞くんですね。つまり弁当を買うより高い交通費をかけて来ている。不安層っていうのはそういうことなんです。本当はその人が必要としているのは、ほかに参加できる場所、居場所なんですよね。このことは本当にちゃんと考えなければいけない問題だと思います。

そして、「この地域のことはもう忘れて、東京に行きなさい」という選択肢もあるかもしれませんが、もし「わたしたちはこの場所に残っていきけるんだよ」ということを伝えていきたいのだとすれば、「持続可能な地域」を作っていくかなくちゃいけないわけです。商店があって、電車なりバスなりも走っていて、働く場があって、日常の生活支援がきちんと成り立っていて、という。

でも、それを自分たちだけで確保するのはもう無理だろうから、いろんなリソースを巻き込んでいかなないと生活すること自体が成り立たないだろう。そう考えると、やはり市町

村の枠を越えて横につながっていかないと難しいですよ。そして、地域の小規模な企業や団体に助けを求めても難しいなら、広域的な団体と連携していく必要があります。

すべては「生きるため」でいいと思うんですよ。その人がその場所でご飯を食べて、心穏やかに、あんまりストレスのないやり方で、住まいつづけることができるやり方。そのために、ぜひそういうまちづくりにあなたも参加しませんか、未来の子どもたちや仲間たちのために「網」を広げていきましょうよ、ということですね。

(文責：編集部)



平野寛治（ひらの・かくじ）

東京都出身。一般社団法人全国食支援活動協力会専務理事（1986年設立）／老人給食協力会ふきのとう代表（1983年設立）／社会福祉法人ふきのとうの会理事長（1996年設立）。

「地域は一つの家族」「食を通じた地域の支え合い」を掲げ、住民参加による助け合い活動の推進に向け、東京都社会福祉協議会・住民参加型助け合いサービス部会運営委員・地域福祉推進委員や、「広かれ、こども食堂の輪！」実行委員会副代表・同推進会議委員、社会的企業研究会運営委員、(一社)日本応用老年学理事、全国社会福祉協議会「広かれ、ボランティアの輪！」構成委員、新宿区協働支援会議委員、地域活性化伝道師(内閣府)等を歴任。



(左) 一般社団法人 全国食支援活動協力会
(右) こども食堂サポートセンター

*1 全国数十か所で講演会やシンポジウムを行った。

<http://kodomoshokudo-tour.jp/>

*2 一般財団法人 日本民間公益活動連携機構。

*3 社会福祉協議会。

*4 2020年始動。主催：ミールズ・オン・ホイールズ日本協会、事務局：全国食支援活動協力会。

<https://mow.jp/mow-ls/>

*5 ターフェルトーリン

<https://www.tafelde/>

ターフェル・ベルリン

<https://www.berliner-tafelde/>

*6 1970年代の西欧で起こった社会運動。ソ連型の独裁的な共産主義ではない、議会制民主主義のもとでの共産主義路線を掲げた。

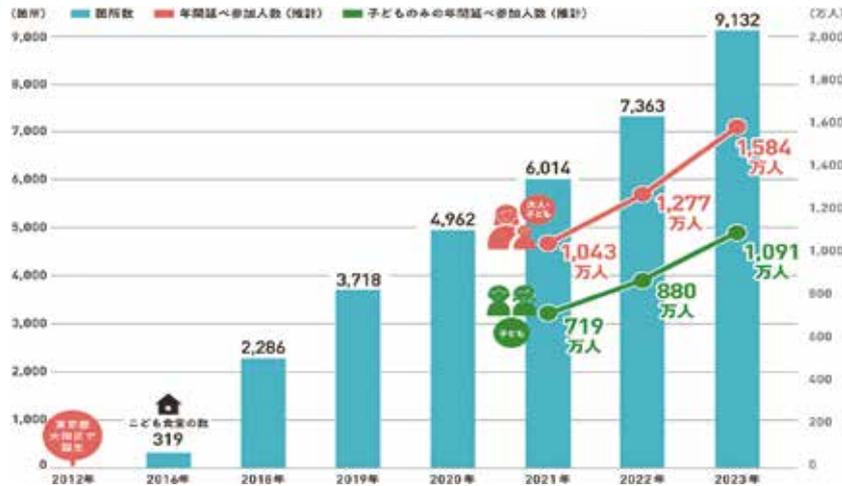
*7 全国母子生活支援施設協議会。

*8 生み出し、育てる機能。

子ども食堂を 知りたい、応援したい、つくりたい!

そもそも「子ども食堂」とはなんなのでしょうか。検索すると、以下のような説明がされています。「子どもが一人でも行ける無料または低額の食堂」、「事情があり、一人で食事をせざるを得ない子どものために食事を提供する場」、「子どもやその保護者および地域住民に対し、無料または安価で『栄養のある食事・温かな団らん』を提供する場」など定義はさまざま。

会場は、公民館などの公共施設、空き店舗、お寺や教会、飲食店の定休日の利用、個人の住宅などで、地域住民主体で活動しているところもあれば、NPOや企業が運営しているところもあり、多種多様です。



子ども食堂の箇所数と年間のべ参加人数(推計)の推移(2023年度 確定値)
(2018年以降は認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ
および地域ネットワーク団体調べ、2016年は朝日新聞調べ)



調査・研究



『子供食堂
スタートブック』

■子ども食堂について知りたい!

全国における子ども食堂は2012年に誕生してから、年々、増加の傾向にあります(グラフ)。子ども食堂の実態や認知度などの調査・研究については、認定NPO法人 全国子ども食堂支援センター・むすびえが行っています(QRコード左)。

■子ども食堂を応援したい!

地域に住む人、食材の生産者の人や企業の人たちで、何かお手伝いしたいけれども、どうしたらいいかわからないという声は少なからず聞こえます。多くの都道府県や区市町村には、子ども食堂ネットワークがあります。まずは地域の社会福祉協議会やボランティアセンターのウェブサイトなどから、どこの子ども食堂でどんな支援が必要なのか(食材やお金の寄付、運搬や調理の手伝いなど)といった情報を調べてみてください。

公共施設を借りていたり、開催日だけ人がいるといった子ども食堂も多いので、食材を送る場合は事前に必ず連絡を入れてください。

■子ども食堂をつくりたい!

「子ども食堂をつくりたいけれど、何からどう始めたらいいの?」「学習支援をしているが、子どもたちの食の課題も感じているので、食事も提供したい」などといったご相談が東京ボランティア・市民活動センターにもあります。

東京都福祉局では『子供食堂スタートブック』を発行しています(画像)。開催場所や必要な手続きなど、立ち上げに必要なポイントなどが示してあります。子ども食堂を実際に始める際にはぜひ参照してください(QRコード右)。

「子ども食堂」という名称を使っていない食堂もあり、保護者や地域で暮らす高齢の人なども利用できる「みんな食堂」「だれでも食堂」などとしているところもあります。

子ども食堂は、子どもをみんなで見守り育てる場であったり、地域の人びとが交流する場としての役割も期待されているのではないのでしょうか。

あすマネ

明日からすぐにマネ(真似・マネジメント)できる!

このコーナーは、TVACに寄せられた相談をもとに、市民活動やNPOの運営にまつわるヒントを紹介しています。

* 本日のご相談 *

「人が足りない」を考える

まちづくりの活動を20年やっています。この数年、メンバーが高齢化しており、人が足りなくて困っています。メンバーからは「活動を続けてくれ」と言われていますが、なかなか良い人が集まりません。もっと若者に来てもらいたいのですが…



● ボランティア活動に「関心がある」?

「人が足りない」や「高齢者ばかりで若い人が来ない」という声は、当センターでお受けしているご相談でもよく伺う内容の一つです。とくに、新型コロナウイルス感染症の広がりは、人と人とのつながりを基盤とするNPOや市民活動に大きな影響を残しました。東京都が実施したボランティア活動に関する調査によると、過去1年間にボランティアに参加したという人は、前年より回復傾向にあるもののコロナ禍以前の水準には戻っていない、という結果も出ています*1。また、非正規雇用の割合が上昇する一方で、物価は高騰し続けており、人々が市民活動に充てる時間と余裕が以前よりなくなっている、という声も聞かれます。

ただ、前述の調査で興味深いのは、男女ともに15〜19歳の過半数が「ボランティア活動に関心がある」と回答していること*2。「関心がある」と回答した人の割合は、全体の約3分の1であることを考えると、他の世代に比べてユース世代の関心が高くなっていることがわかります。当センターでも近年、中高生など学生有志に

よる活動のご相談が目立っており、若い世代の社会課題に対する意識の高まりを感じています。ボランティア・市民活動に関心のある人々が、どのように活動と出会い、そこに参加する機会を得られるのか、その流れを自然な形で広げていけるか、ということも大きな課題です。

● 本当に「人が足りない」のか

ところで、本日のご相談のように、「活動の担い手が足りない」というとき、「どなたか良い人を紹介してもらえないか」と、団体の外側に新しい人材を求めようとしている場合が少なくありません。もちろん、まだ活動を立ち上げたばかりで、一緒に活動を担う仲間を探している段階であれば、「人探し」は優先すべき課題でしょう。けれども、すでに長く活動を続けているケースでは、組織のマネジメントを見直した方が良い場合もあると感じています。いくつかの団体の事例を見てみましょう。

○ 大事な作業が1人に偏っている

小さな団体でよくありがちな



は、活動を進める上で大事な作業とその手順を、ほとんど1人だけが把握しているということです。環境保護活動を行っている団体Xでは、代表が事業の企画、広報、会計などを一手に引き受けており、他のメンバーは、事後報告を受けるだけで、具体的な作業内容について何も把握していませんでした。あるとき、代表が急病で入院することになり、その間、他のメンバーは何をどうしたらよいかわからず、しばらく活動が滞ってしまいました。この団体では、多くの仕事がブラックボックス化していたため、活動を担う人の負担はなかなか軽減されない一方で、他のメンバーが主体的にかかわりにくくなっていました。

○事務局が

「下働き」になっている

以前の「あすマネ」^{※3}でも取り上げたことがあります。事務局

スタッフが実質的な「下働き」状態になっているケースもあります。高齢者の居場所づくりを行っている団体Yでは、対外的な発信を積極的に行っている代表と事務局スタッフとの間で、日頃から意思疎通がとれていませんでした。イベント直前になって突然、代表から事務局に作業を割り振られたり、重要な判断を「丸投げ」されたりすることが重なり、スタッフが定着せず、何度も入れ替わる事態が起きていました。この団体では、代表と事務局スタッフとの対話ができていなかったと言えるのかもしれない。その結果、事務局スタッフは、自分たちが尊重されていると感じられず、モチベーションを保てなくなっていました。

○活動が急に大きくなりすぎた

また、組織が短期間のうちに急に大きくなりすぎて、活動を担う人の体制が間に合わない、というケースもあります。日本で暮らす海外ルーツの子どものための学習支援に取り組んでいる団体Zは、利用希望者が増えたために、この数年のうちに教室を3カ所増設しました。民間の助成金を得て、何とか運営資金を工面できたのです

が、肝心の人員を確保できず、同じスタッフが複数の教室を掛け持ちする形で何とかやりくりしています。この団体のように、急なスピードで活動が拡大しているとき、それを支えるメンバーの負担も大きくなりがちなので要注意です。

●人が集まる

組織になるために

いずれの事例も「人が足りない」の背景には、組織のマネジメントにかかわる課題があるようです。では、どうすれば人が集まりやすい組織になるのか、いくつかのキーワードを手がかりに考えてみましょう。

○作業を「目に見える」形にする

活動を進める上での具体的な作業内容と手順が、それを一手に引き受けている人以外のメンバーには何も見えていない、ということがよくあります。もし、団体の中で責任と負担が偏っている人がいるなら、その人が担っている作業内容を一つずつ書き起こして、他のメンバーに目に見える形にしてみてもどうでしょうか。ある団体では、代表が担っていた作業を洗

い出すことで、代表一人に重い負担が偏っていたことを、他のメンバーが初めて知る機会となり、その結果、少しずつサポートし合えるようになったそうです。

○役割を分担する

内部での役割分担がはっきりしていない団体も少なくありません。ご相談を受ける中で「他のメンバーも皆、高齢だから…」とか「手伝わってもらうのは悪い」などの声を聴くこともあります。ただ、組織のメンバーである以上、何らかの役割があることは当然のことです。それまで「お客さん」的なかわり方をしていたメンバーが、明確な役割をもつことで、もっと主体的に活動に参加するようになったというケースもあります。外から「他の誰か」を探してくるだけではなく、「今いるメンバー」の得意なところや長所を見つけ、お互いを生かし合う関係をつくることも、マネジメントの大事な要素です。

○活動のあり方を見直す

少し勇気があることですが、活動が広がりすぎて、メンバーが疲弊している団体の場合、活動自体

を見直して、いったん整理した方がよいときもあります。以前、ご相談を受けた団体では、活動を始めるきっかけとなった原点到立ち返り、「今いるメンバー」で何ができるのかを話し合った結果、活動を縮小しながらも着実に続けているとのことでした。「人」あつての市民活動ですので、メンバーが疲弊しているのであれば、たまには本来のミッションを確認し合う場を設けてみるのもよいと思います。その上で、この体制で続けていくのは難しい、と皆が納得したときには、同じような活動内容をしている他の団体に思いを引き継いで解散する、というのも一つの選択肢かもしれません。



●参加を呼びかける

組織のあり方を見直した上で、やはり活動への新たな参加者を呼びかけたい、というとき、団体の理念や活動内容をわかりやすく発信することが不可欠です。チラシやパンフレットの紙媒体を作成したり、ブログやSNSなどのオンラインで宣伝したり、さまざまな発信の仕方があります。チラシのつくり方やSNSの活用方法など、広報に関することについては、当センターや地域のボランティアセンターにもご相談いただければ、

また、誰に知ってもらいたいのか、対象を考えることも重要です。たとえば、福祉関連の活動なら社会福祉系の大学にあるボランティアセンターに、ジェンダーに関することなら男女共同参画センターに、という具合に、団体の活動テーマに関心がありそうな人が多く集まる場所に焦点を絞る、というやり方もあります。いずれにしても、誰かを自分の領域に「取り込む」のではなく、活動に参加する人の持ち味や得意分野が発揮できる場になっているか、という視点を大事にしたいところです。

●組織のあり方としてとらえなおす

ここに挙げたことはあくまで一例で、団体の規模、歴史、体制によっても違いはあるでしょう。ただ、「人が足りない」を組織のあり方の問題としてとらえなおすことで、多くの団体に共通する課題が見えてきます。その解決をすぐに団体の「外側」に求める前に、団体の「内側」にあるものに目を向けることも有効です。「人」あつての市民活動、お互いの得意なところを生かし、それを発揮できるような場づくりを心がけていきたいです。その上で、今いるメンバーで何ができるのか、という視点を大事にして活動を続けていけるとよいのではないのでしょうか。

当センターでは、法人格の有無にかかわらず、NPO、市民活動団体の運営にまつわるご相談を受けています。まずは気軽にご連絡ください。

金井 聡 (相談担当)

東京ボランティア・市民活動センターの相談

東京ボランティア・市民活動センターでは、NPO、ボランティアグループからのNPO法人設立・運営などのご相談をお受けしています。ぜひ、お電話ください。

TEL : 03-3235-1171



*1 東京都生活文化スポーツ局(2023)「令和4年度 都民等のボランティア活動等に関する実態調査」より

*2 「とても関心がある」「どちらかといえば関心がある」の合計が、15〜19歳の男性で54・2%、女性で58・4%。

*3 東京ボランティア・市民活動センター(2023)「あすまね 市民活動は事務の堆積」NPOの事務局、どうなっていますか」『ネットワーク』3002号、pp12-14

能登半島地震における対応について

東京ボランティア・市民活動センター（以下、TVAC）では、令和6年1月1日に発生した能登半島地震に関して、TVACとしてできる支援を模索しながら取り組んでいます。

① 情報発信

TVACのウェブサイト「ボランティアWEB」では、被災地のボランティア活動のための支援金や物資支援の情報、災害ボランティア



1

や支援団体に関する情報を発信しています。東京にいてもできる支援も情報掲載しています。また現地で活動しているNPO等の団体向けに、助成金情報や現地の道路状況なども記載しています。

② 都内一斉街頭募金の提案

TVACと災害協働サポート東京（以下、CS・Tokyo）では、都内一斉街頭募金を都内の区市町村ボランティアセンターや市民活動団体に向けて提案しています。

3月30日時点で48団体が延べ101回の街頭募金を都内各地で実施し、約680万円が集まりました。この寄付金は主に支援金として寄付されます。

③ 現地調査の実施

1月20日から3日間、今後の被災地支援のために被災地調査を実施しました。本調査を踏まえ、TVACでは、関係団体とさらなる連携を図りながら、東京都やCS・Tokyoとともに能登半島地震の被災者支援活動を実施します。また、東京都が提供した都営



3



2

住宅を含め、東京に避難されている方への支援も並行して検討していきます。



5



4

1. TVACと東京都社会福祉協議会の有志スタッフで行った街頭募金。
2. 輪島市の道路の様子。
3. 輪島朝市通り。およそ200棟が消失。
4. JR穴水駅のトイレ。断水のため貯め水で流す。男性小のみ使用可、女性は不可だった。
5. 災害NGO「結」では、奥能登の支援のため七尾市に拠点を設置。



ボラ市民WEB



都内一斉街頭募金



CS-Tokyo

2024年度ボランティア・市民活動総合基金 「ゆめ応援ファンド」助成決定

ゆめ応援ファンド（事業名：ボランティア・市民活動支援総合基金）は、

東京都内におけるボランティア・市民活動の開発・発展を通じて市民社会の創造をめざすために、地域住民や住民団体のボランティア・市民活動に対して必要な資金の助成を行うための基金です。

今年度も多くのボランティア・市民活動団体からご応募をいただきました。今回の応募では、高齢者や障害者に関わる活動、多文化共生、様々なセルフヘルプ・当事者活動、不登校やひきこもりの支援、子育て支援や居場所づくりの活動、防災やまちづくり、アートを介した発信やつながりづくりなど、多様な分野・領域から合計83件の申請がありました。申請の傾向としては、「学習・研修活動」および「市民への啓発活動」が19件と多い一方で、昨年に引き続き「調査・研究」の申請件数が1件と、減少傾向が続いています。

配分審査においては、「事業の発展性・効果性・継続性」「事業の具体性・実現性」「より社会的な支援が少ない活動や対象者へ」等の観点を踏まえ、審査を行いました。

助成団体名は以下の通りです。

■単年度助成

- ・カラフル・オルタレゴ
- ・おくたま子育て環境向上委員会 KURUMI
- ・いきがい安心ジョイフル結の会
- ・防災コミュニティネットワーク
- ・高次脳機能障がい者の家族の集いりんく
- ・石神井・小さなおうち
- ・WA温
- ・ぼまるのおうち
- ・羽村市ボランティア連絡協議会
- ・スパイス・クック・サンバンド
- ・未来の森
- ・PCN東京多摩
- ・子育てサークル KOGUMA CAFE
- ・みんなの進路委員会
- ・ころころパーク
- ・ネット・ゲーム依存家族の会
- ・ピアノ読みきかせにじのね
- ・ポラとも
- ・リテル

■継続助成・新規

- ・街 in g 本郷

■2022年度、2023年度からの継続助成

- ・OMUSUBI
- ・多文化ひろばあいあい
- ・キラリっこファミリーカフェ

第6回「都内子ども食堂、子どもの食支援ネットワーク等担当者連絡会」を開催

2024年2月20日「都内子ども食堂、子どもの食支援ネットワーク等担当者連絡会」を東京ボランティア・市民活動センターで開催しました。参加者は、社会福祉協議会、行政、実践者で各地域のネットワークの事務局を担っている人や、業務で子ども食堂からの相談を担当している人など合計40名。

今回のテーマは「地域とつながるいろいろなカタチ」。板橋区社会福祉協議会からは「いたばし子どもの居場所連絡会」や「街かどフードパントリー」などについてお話がありました。

情報交換の時間では、①食材の配布や保管等の協力団体について、②ネットワークでの約束事やルール、気を付けていること、③地域とのつながりで取り組んで

助成内容・事業、金額については、左記QRコードをご覧ください。



いることややってみたいアイデアの3つのテーマを中心に、それぞれ質疑応答や意見交換をしました。また、会則や規約を作っているネットワークには提供を依頼して、共有しました。同連絡会では、今後も情報交換の場をつくっていく予定です。





『少女パレアナ』
エレナ・ポーター著、
村岡花子訳/
KADOKAWA/角川文庫
ISBN : 9784042212010

My Favorite Things

～私のお気に入り～



『ケーキ ケーキ ケーキ』
秋尾望都著/白泉社文庫
ISBN : 9784592883234

2024年も早や4月。日々の報道では日本のみならず世界各地で起る紛争、災害、人道危機の状況などを目の当たりにし、個人を取り巻く生活環境の変化や対人関係など自覚できない不安の中、自分達がこれからどうなっていくのかわからなくなる。養老孟司氏は「人生の意味なんか『わからない』ほうがいい(中略)気を散らせばよい」という趣旨の話をしていた。(出典:『ものがわかるということ』まえがきより、祥伝社、2023年)

そのような時にふと耳元に流れてきたのがミュージカル映画『サウンド・オブ・ミュージック(1965年)』でジュリー・アンドリュースが雷を怖がる子ども達に歌った『My Favorite Things(私のお気に入り)』という歌。「嫌なことがあって落ち込む時は、自分のお気に入りの思い出せば大丈夫」というような歌詞である。

その頃読んでいた本の中にこの歌と同じような考えを持つ少女の話があった。アメリカの児童文学作家エレナ・ポーター氏が書いた『少女パレアナ』である。両親を早くに亡くしたパレアナは、自分の両親をよく思わない叔母にひきとられる。過酷な生い立ちや寂しさ、事故による病など様々なものを抱えながら生きる彼女を支えたのは父親から教わった「何でも喜ぶゲーム」。詳細には記さないが、簡単に言えばどんなに辛い悲しいことがあっても何かしら喜びをみつめていくゲームである。そのゲームが彼女を取り巻く人々の間に広がり、人々を結び付けていく話で、本を読んだ当時、やってみた記憶がある。

そういえば、今は亡き父も、大病を患った時に深夜ラジオで聞いたという「困ったことは起こらない。すべて良くなる。嫌なことは思い出さない」という言葉を言葉霊として自分で紙に打ち出し、最後の日まで眺めていたことを思い出した。今回調べてみたら、脳科学者の高田明和氏の言葉であった。国や人種が変わっても、気持ちを癒やす何かを心に宿したいと思う。

気持ちは同じなのかもしれないと思う。

どちらとも言葉にすれば簡単だが、現実には多くの困難を抱えている人にとって、それは絵空事なのでは? という批判もあるかもしれない。が、それは各人の考えに委ねたい。

私の My Favorite Things は何だろう? 青春時代は「原チャリで走る時に頬にあたる風、オフコース、喫茶店の珈琲、片岡義男」だっただろうか? 今は「韓国ドラマ、アガサ・クリステイ、印象派、クロテッドクリーム&スコーン&ジャム、パン活etc.」。

この文章を書きながら、もうひとつ私がスイーツを好きになったきっかけも思い出した。萩尾望都氏の漫画『ケーキケーキケーキ』。まだスイーツがハレの日のおやつだった頃の物語。当時の気持ち溢れ出してくる。

今日は少しだけ心が深呼吸できたようだ。皆さんの My Favorite Things は何ですか?

(つづ)

ネットワーク

本誌のバックナンバーは
右記からご覧ください。



～本誌388号より～

読者の声



読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

◆表紙、表紙のことば

・お花の周りで子供や動物が楽しそうに集う姿は春を教えてくださいました。

◆思い立ったがバラ日

・街頭募金活動を

中高生グループVIOLETTで!!

・寒い中、立っているだけでも辛いのに、中高生が大きな声を出して呼びかけ、素晴らしいことです。

◆特集 市民活動の寄付って?

・寄付とは概ねお金ですることと思っていましたが、寄付の多様性を知りました。中でも関口さんへのインタビューで「寄付はわがまま」であり、わがままだから多様性があるとの指摘は、的を得ていると思います。

◆TVAC News

『企業ボランティア・アワード』
受賞企業決定

・それぞれの企業の強みを生かした活動をされていて、いろいろな形の活動があるのだなと思いました。

◆いいものみい〜つけた!

Volo 大阪ボランティア協会

・全国各地のボランティア活動をもっと知りたいです!

◆セルフヘルプという力

高次脳機能障がい者の家族の集いりんく

・自分が当事者や家族になる可能性もあることを考えると、まず、どういうことなのかを理解することが非常に大切なことだと思いました。

◆2023年ボランティア・NPO・市民活動をめぐる動き

・年表からボランティア活動の幅広さと社会的な意味をより感じました。

◆連載 せかいを見る

ケニアのシングルマザーと子どもたち

・外から見るとなぜ?というような状況でも、その社会で長年持たれ続けている通念をひっくり返すのは簡単なことではないのだと知りました。

◆つばやきブレイク 人は非合理的?

・誰にでもわかりやすい書籍を通して「ココロ」と「経済学」という相容れない事について伝わると良いなと思う。

お気軽にご意見・ご感想をお寄せください。



本誌で使用しているQRコードは、(株)デンソーウェブの登録商標です。

東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<https://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

利用

会議室 会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料

※会議室AB通し(80人)

貸出機材 印刷機(2台)紙持ち込み、点字プリンター 他

申込み 4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。<http://www.tvac.or.jp/>

開所時間

火曜日～土曜日: 9時～21時 / 日曜日: 9時～17時
(月・祝祭日・年末年始除く)

交通アクセス

JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線 出口B2b)飯田橋駅下車

ネットワーク

発行人 山崎美貴子

編集委員 上杉真雅(メイクスマイル/オレンジフラック)

江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)

片岡紀子(患者スピーカーバンク)

亀川悠太郎(葛飾区社会福祉協議会)

小池良実(岡さんのいえTOMO)

長畑 洋(TDU-隼野大学)

中原美香(NPOLISK・マネジメント・オフィス)

野村美奈(武蔵野会 リアン文京)

室田信一(東京都立大学)

TVACの公式ソーシャルメディア



編集・発行: 東京ボランティア・市民活動センター

〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1

セントラルプラザ10階

TEL: 03-3235-1171 FAX: 03-3235-0050

E-mail: nw@tvac.or.jp

印刷: 島津印刷(株)

デザイン: 東京ボランティア・市民活動センター/島津印刷(株)

表紙イラスト: フローラル信子

2024年4月20日発行(通巻No.389)

ISBN 978-4-909393-54-8 C2036

定価400円(本体364円+税10%)

本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。



1 0 0 1 1 0 6 5



御徒町駅前広場で『ふくしつながりフェスタ』を実施！（ユニクロ御徒町店とコラボでUTme! TシャツPR）。写真中央がデザイナーのお2人。左右はユニクロ御徒町店スタッフ。

いいもの みい~つけた!

このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。

Vol.
48



上野中央通り商店会の『ウエノデ・ビアフェスタ』への複数団体とのコラボ参加。UTme! Tシャツも障害福祉施設ごとに制作してPR。

アートで地域共生!!

～障害福祉施設と作る、UTme!* Tシャツ～

私達、台東区社会福祉協議会が目指すのは、アートの取組みを通して、【知る機会】を増やすことです。福祉に関する話は、自身や身近に関係がないと、あまり関心を持ってもらえないことが多いと感じています。福祉と接点が少ない方にも、まずは知ってもらうこと。その点を大事にしています。

そこで着目したのが、「かわいい」・「かっこいい」・「いいね」と、入口で良い印象を持ってもらえるアートの活用です。左側の写真の取組みに共通していることは、福祉と接点が少ない方へのリーチを意識している点です。私達の今後の目標は、福祉に関わる様々な分野でアートを活用し、地域のお店などにもご利用いただき、普段の暮らしの中にもっと【知る機会】を増やしていくことです。そのことが、ひいては当事者の方にとって、より良い暮らしにつながるものと考えています。地域の方と区内の福祉がつながる場面を数多く作っていきたいです。



区内ファミリーマート店舗での常設アート展。今まで活用しているデザインも大活躍!

*『UTme! (ユーティーミー)』はユニクロ (UNIQLO) が提供する簡単にオリジナルデザインのアイテムをつくることのできるサービス。Web上の専用マーケットに出品し販売することもできる。

上記写真提供・台東区社会福祉協議会



『UTme! マーケット』Webページから [taitoshakyo_nodd](https://www.taitoshakyo_nodd.com)

数多くある台東区内の障害福祉施設とのコラボレーション。当事者の方々が思い思いに描いたアートをファッションデザインに落とし込み、日常の中で楽しめるものになりました。売り上げの全額が、各福祉施設への収入となります。デザインは「障がい者アートブランド」を手掛けるNODDが作成。買う! 着る! 広める! 楽しみながら、誰かのありがとうにつながる1枚!



作り手インタビュー

工程のひとつひとつに、様々な人が手をかけてできあがる、『いいもの』。
制作にまつわるお話をうかがいました。



台東区社会福祉協議会と Tシャツのデザインを担うデザイナーの方にお話をうかがいました。

—Tシャツの制作はどんなきっかけから始まったのでしょうか。

台東区社会福祉協議会では一昨年、地域の様々な団体が出展する『ふくしつながりフェスタ』を御徒町駅前の広場で初めて開催しました(右頁上写真)。コロナ禍での新たな企画を模索するなかで、気になっていたデザイナーさんがいたこと、広場横にユニクロ御徒町店さんがあったことから、『UTme!』*のサービスを使って出展予定の区内の障害福祉施設(以下、施設)と一緒にオリジナルTシャツを作ろうと思い立ち、デザイナーさんに協力打診をし、この企画が実現しました。ユニクロ御徒町店さんにはイベント参加とPRにご協力いただきました。

*デザインはソーシャルデザインブランド「^{ノッド}NOOD」を手掛けるお2人が担当。
ブランド名にはODD[常識ではない]とされるものにNOを唱え新しい常識を創り上げる、そんな想いが込められている。



—デザイナーの方にお聞きします。Tシャツの制作の過程を教えてください。

まず、ワークショップをひらいて施設のみなさんに思い思いにアート(イラスト)を描いてもらいます。それらをわたしたちが組み合わせ、ひとつの作品に仕上げ、Tシャツにプリントされるという流れです。つまり、このアートは誰かひとりではなく、みんなで作る作品です。誰も取り残さないためのデザイン、そこが肝だと思っています。



みんなのイラストが
組み合わせるアート
作品。

—Tシャツの反響はいかがでしたか？

多方面の方からご好評を得ることができました。まず、みなさん、見た瞬間にいい反応をしてくださるのでうれしいです。とくに、施設のみなさんに喜んでいただけましたし、その親御さんが喜んでいたという言葉をお聞きし、感慨深いものがありました。

また、このTシャツの企画をきっかけに、上野中央通り商店会の方が商店会主催の『ウエノデ・ビアフェスタ』のイベントにお誘いいただき、施設のみなさんと一緒に出展しました(右真中写真)。さらに、区内ファミリーマートの店舗での常設アート展も実施することができ、アートの力を感じています(右頁下写真)。



前列左から渡邊さん(りんご村)、Mさん(作家のひとり)、飯野さん(つなぐ台東)、寺門さん(NODD)。後列左から仲西さん(NODD)、松永さんと渡邊さん(ともに台東区社協)。

社会福祉法人 台東区社会福祉協議会

所在地 〒110-0004 東京都台東区下谷1-2-11

TEL 03-3847-7065

FAX 03-3847-0190

E-mail vc@taitoshakyo.com

HP <https://taitoshakyo.com/>



社会福祉法人清水基金

社会福祉法人・NPO法人への建物・設備等の整備を支援する助成事業や
職員の皆さんの研修事業を通じて、障害福祉サービスの一層の向上を図ります。

2024年度 助成事業・研修事業を募集しています。

社会福祉法人助成事業

対 象

障害者の福祉増進を目的として第一種・第二種社会福祉事業を営む社会福祉法人であり、2024年4月時点で開設後1年経過した事業所

申込期間

6月1日～7月20日(当日消印有効)

内 容

- ・助成物件 利用者に必要な機器・車輛・建物等
- ・自己負担率 総費用の30%以上
- ・助成金額 1法人原則1物件、50万～1000万円
- ・決定時期 2025年1月末

NPO法人助成事業

対 象

障害者の福祉増進を目的として第二種社会福祉事業を営むNPO法人であり、2024年4月時点で法人設立後3年経過し、開設後1年経過した事業所

申込期間

5月1日～6月20日(当日消印有効)

内 容

- ・助成物件 利用者に必要な機器・車輛・建物等
- ・自己負担率 総費用の20%以上
- ・助成金額 1法人原則1物件、50万～700万円
- ・決定時期 2025年1月末

海外研修事業

対 象

- ・社会福祉法人・NPO法人に所属し、障害福祉サービス等に従事しており、海外の障害福祉等から学ぶ課題を持ち、意欲的に挑戦する方
- ・実務経験5年以上、年齢25～60歳

申込期間

9月1日～10月31日(当日消印有効)

内 容

- ・募集人数 5名
- ・助成金額(1名当たり、予定) 100万円～200万円
※研修期間・内容等により助成金額を設定
- ・決定時期 2024年12月
- ・研修期間 2025年9月～11月
※研修期間は研修生自身が設定可とする(1～3カ月)

文化芸術活動特別助成事業

対 象

障害者の福祉増進を目的として第一種・第二種社会福祉事業を営む社会福祉法人及びNPO法人であり、2024年4月時点で、社福は開設後1年経過した事業所、NPOは法人設立後3年経過し開設後1年経過した事業所
※他法人とのグループによる申込みも可

申込期間

5月1日～6月20日(当日消印有効)

内 容

- ・助成物件 障害者の文化芸術活動に必要な道具・楽器・機器等
- ・自己負担率 総費用の10%以上
- ・助成金額 1法人(1グループ)1案件、30万～200万円
- ・決定時期 2025年1月末

※2024年度国内研修は2回開催を予定しています。

詳細は清水基金ホームページをご参照ください。

